

## キャラ語尾「です」の特徴と位置付け

川瀬, 卓  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/25271>

---

出版情報 : 文献探究. 48, pp.1-14, 2010-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# キャラ語尾「です」の特徴と位置付け

川 瀬 卓

## 1. はじめに

標準語において、丁寧形は、動詞には「ます」、名詞、形容詞、形容動詞には「です」を接続させて作られる。つまり、「動詞+です」は非文法的であり、「食べるです」「食べたです」のような言い方は普通しないとされている。ところが、「です」の標準的な接続とは違う用例が見られることがある<sup>1</sup>。

- (1) a. 仙童紫「あっありがとう／ございますっ／助かったです～」 「私は／仙童紫／ついています」 (『ロザリオとバンパイア』2)
- b. フレンド登録をさせていただいた方には、フレンドメールをお送りしますので明日を楽しみにしていただければと思いますです(´・ω・´)

(2009/2/18、<http://messenger-a.paslog.jp/article/708372.html>)

このような例は、標準語の「です」とは違う、ある種のキャラクタ性を帯びていると考えられ、金水(2003)というキャラ語尾相当のものと考えられる。

キャラ語尾の概念は近年、定延(2007)、定延・張(2007)によって、その理論の精緻化が進められており、今後もさらなる発展が期待されている。キャラ語尾の「です」は、これまでの役割語研究においてあまり扱われてはいないが、「です」のように日常使われるコンピュータが規範からずれる形でキャラ語尾として用いられる事例は、キャラ語尾の概念の精緻化を進める上で考えるべき問題であろう。

では、キャラ語尾の「です」はどのような特徴を持っており、どのように位置付けられるのだろうか。本稿では、キャラ語尾の下位分類基準とされている形態的特徴、文中の現れ方といった統語的特徴、およびキャラクタとの結びつきに注目し、キャラ語尾「です」の特徴と位置付けについて考察するとともに、下位分類基準の再検討も行いたい。

まず、2節で役割語の概念とその捉え方、そしてキャラ語尾の下位分類について、先行研究をもとに概観する。次に、3節でキャラ語尾「です」の特徴と位置付け、および、キャラ語尾の下位分類基準について考察する。4節では「です」の歴史を概観することによって、キャラ語尾「です」の成立背景について検討する。最後に、5節でまとめを述べる。

## 2. 役割語とキャラ語尾

### 2.1 役割語とその捉え方

まず、問題理解の前提として、「役割語」と「キャラ語尾」について先行研究を整理してお

く。役割語は、金水(2003)によって提案された概念であり、次のように定義されている。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（金水 2003: 205）

つまり、「そうじゃ、わしは知っておる」というと博士が思い浮かび、「拙者は知っているでござる」というと侍が思い浮かぶ、というような特定の人物像と言葉遣いと結びつきを問題としたものである。さらに、主な役割語の指標として、人称代名詞と文末表現をあげた上で、文末表現のうち「何かご用クボ?」「拙者が行くナリ」の「クボ」「ナリ」ような特定のキャラクタに与えられた語尾をキャラ語尾と呼んだ<sup>2</sup>。

現在、役割語に対する考え方としては、大きく分けて2つの立場があるといえる。1つは、社会的なステレオタイプの範囲内で考察しようという金水の立場である。もう1つは、様々な要素に注目し、それらがどのようなキャラクタを表しているかを考察する定延の立場である。定延は、「へえ」「ほう」という応答がどのようなキャラクタを表すか、発見の「た」がどのようなキャラクタを表すか、などの考察を行っている。金水の立場は、全体からことばとキャラクタの関係を捉えようとする立場であり、定延は一部分である要素の側からことばとキャラクタの関係を捉えようとしているともいえる<sup>3</sup>。

キャラクタはさまざまな属性によって全体として決まるものであり、要素そのものではない。キャラクタは言語的特徴、身体的特徴、性格的特徴など、さまざまな属性の集合体であり、その全体である。キャラクタを特徴付けるもののうち、言語的特徴に限ってみても、人称や笑い声、感動詞、さらには音調などもあり、それらの組み合わせによってキャラクタは特徴付けられる。キャラ語尾はキャラクタを特徴付けるものの一つである言語的特徴に属し、さらに、その一部分を担う要素にすぎない。しかし、当然のことながら、要素それぞれが全体に影響を及ぼすということもいえる<sup>4</sup>。

本稿は、要素の側からキャラクタについて考えようという立場にたち、「です」という要素のふるまいについて考察する。

## 2.2 キャラ語尾の下位分類

2.2 ではキャラ語尾の下位分類について整理する。キャラ語尾という概念については、定延(2007)、定延・張(2007)によってさらに精緻化され、その下位分類として「キャラコピュラ」「キャラ助詞」「キャラ終助詞」の三つが提案されている。

定延(2007)では、日本語と韓国語を考察対象とし、キャラ語尾の下位分類としてキャラコピ

ユラとキャラ助詞を分けることが提案された。キャラコピュラは、「でござす」「でござる」などのように、コピュラ（「だ」「です」「でございます」「である」など）の変異体と考えられるものである。一方、キャラ助詞は、「クボ」「ひょーん」「ふう」などがあげられる。キャラ助詞のほうは、キャラコピュラと違って、ある標準的な語形をもとにそれを変異させたとは考えにくい。

定延・張(2007)では、日本語と中国語とを比較して、新たに「キャラ終助詞」と呼べるものが存在することが指摘された。キャラ終助詞の日本語の例としてはインターネットの書き込みなどでみられる「そうだお」「行くお」の「お」があげられる。

これらの区別の基準をまとめると、次の3つになるという。

- (2) a. その位置に現れる「ふつう」の語句と形態が類似しているかないか
- b. 発話キャラクタ<sup>5</sup>のモデルが現実世界にはっきりした形で存在するかないか
- c. 現れる環境が文末にかぎられないか、かぎられるか

(2a)は形態的特徴、(2b)はキャラクタとの結びつき、(2c)は統語的特徴に基づく基準である。これらの基準からすると、典型的なキャラ助詞は、「ふつう」の語句と形態が類似しておらず、発話キャラクタのモデルがはっきりとは存在せず、現れる環境が文末に限られる」という特徴をもつということになる。また、定延(2007)では、3基準のランク付けはなされていなかったが、定延・張(2007)において、(2b)のキャラクタモデルの有無という基準は相対的に軽いものと修正された。

以上のようなキャラ語尾に関する理論は、まだ構築され始めた段階であり、今後もさまざまなデータや分析が求められているという現状にある。本稿では、今まであまり扱われることのなかったキャラ語尾としての「です」を分析することによって、基準のランク付けについての再検討も行い、キャラ語尾の理論構築に貢献したい。「です」は、「でござる」のような形態的に変異しているあきらかなキャラ語尾と異なり、形態的には変異していないという特徴をもつため、キャラ語尾の下位分類において境界例となる存在である。したがって、キャラ語尾の分類を考察する上での問題点を提供できると考えられる。

### 3. キャラ語尾「です」の特徴と位置付け

#### 3.1 キャラ語尾「です」における表現の意図性

キャラ語尾の「です」について考察する前に、「動詞+です」のような言い方が話し言葉で出現することがある、という問題に触れておく必要がある。たとえば、前川(2007)は、対談や国会会議録などで「それだもんで参っちゃったですよ」「政府は一体具体的に何をやったのですか」などの用例がみつかることを指摘している。つまり、「動詞+です」は絶対的に非文というわけではないということである。これがさきほど「普通しないとされている」と述べておい

た理由である<sup>6</sup>。

しかし、実際に話し言葉で無意識的に使用するこれらの言い方と、意識的にキャラクターの表現として使用するキャラ語尾の「です」の場合とでは、その性格が異なると考えられる。この点に関しては、山口(2007)で整理されたフィクションにおけるコミュニケーションの構造という観点を考慮する必要がある。山口(2007)が述べるように、フィクションにおいては、登場人物が行う微視的コミュニケーションと、作者が読者に対して行う巨視的コミュニケーションという二つのコミュニケーションが存在する。この点は日常のコミュニケーションとは異なる特徴である。

たしかに日常のコミュニケーションにおいて、丁寧さを表そうとして、無意識的に「です」が文末にくるといふ使用がなされることはありうる。しかし、その場合、あくまで相手に配慮を示そうとしているだけであり、それ以外の効果を狙ったものではない。一方で、フィクションにおけるコミュニケーションにおいては、ある人物にあるしゃべり方をさせて、それによってキャラクターを作りだそうという、作り手側の意図がある。この作り手側が意図的に伝えようとする行為は、受け手に対して行う巨視的コミュニケーションに他ならない。フィクションにおけるキャラ語尾の「です」使用は、ずれから生み出されるイメージを利用して、ある種のキャラクター性を表現しようと意図的になされたものと考えられる。

以上のように、フィクションと日常のコミュニケーションの構造の違いを考慮して、キャラ語尾の「です」は、話し言葉にときおり見られる無意識的なものとは違う性質のものとして、検討していくことにする。

### 3.2 キャラ語尾「です」の統語的特徴

3.1 では、コミュニケーションの構造に注目し、表現の意図性という点から、キャラ語尾「です」の特徴について述べた。次に、定延の基準によって「です」の諸特徴を整理していくことにする。2.2 で整理した3つの基準のうち、形態的特徴に関しては、あきらかにコピュラそのものであるといえる。したがって、検討すべきは、キャラクタとの結びつきと統語的特徴の2つということになる。本稿では、キャラ語尾「です」の統語的特徴を検討したのち、キャラクタとの結びつきについて考察することにする。

- (3) a. 新妻エイジ「あっ／大切なノートだから／引き出しに入れてたです」（『バクマン』3）
- b. 新妻エイジ「小学校／入った時から／マンガ描いてるから／色々使えるの／あるです」（『バクマン』3）

この例は、動詞のル形やタ形に直接「です」がついている例である。このように、キャラ語尾「です」は動詞の後に接続する点で標準語と異なるが、キャラ語尾の「です」が接続するのは動詞のル形やタ形に限らない。次の例のように、「ます」の後ろに接続しているものや、命

令文に接続している例、あいさつ文の後ろに接続しているものもみられる。

- (4) a. みちる「れもんの汁を足した／水もなかなか／いけますですー」（『ながされて藍蘭島』13）  
b. みちる「あははっ／掛かりました／です!!」（『ながされて藍蘭島』13）  
(5) 古手梨花「痛い痛いの／とんでいけです」（『ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編』1）  
(6) おはようございますです。

(2009/2/18、[http://ohbakumiko.cocolog-nifty.com/blog/2008/03/post\\_790a.html](http://ohbakumiko.cocolog-nifty.com/blog/2008/03/post_790a.html))

さらに、文中で現れる位置に注目してみよう。

- (7) a. 古手梨花「もう繰り上がりの足し算とかも出きますですよ」（『ひぐらしのなく頃に 暇つぶし編』1）  
b. 古手梨花「赤坂は明日も／来ますですか?」（『ひぐらしのなく頃に 暇潰し編』1）  
c. (このお仕事 etc につきましては、いずれマダムが記事をお書きになる為にネタを集めてらっしゃいますですので、お愉しみにです^^b)

(2009/2/18、<http://blog.livedoor.jp/fuusama7/archives/51442632.html>)

このように「です」は終助詞の前に現れ、また、従属節の中で用いられることもある。この点は、定延(2007)のいうキャラ助詞と違う点である。キャラ助詞は、「うそだよーん」「今日は誰かねぶーん」のように終助詞の後ろに現れるということが指摘されている。また、キャラ助詞が終助詞の後ろに現れるということは、従属節の中にも現れないということでもある。「です」が終助詞の前に現れ、また、従属節の中で用いられるという特徴は、キャラ助詞ではなく、むしろ「でござる」「でおじゃる」のようなキャラコピュラと共通する。

これに対し、「です」はキャラ助詞ではないかとする意見もありえよう。たとえば、西田(2009)は、注10で「翠星石は丁寧のデスを、定延(2007)の提起する「キャラ助詞」として使用するキャラクターでもある。」と述べている。これは、次のような例があることによるものと考えられる。

- (8) 翠星石「下等動物にも／わかるよう簡単な言葉で／言ってやったです／その寝ぐらに／潜って出てくる／なよ……です」（『ローゼンメイデン』2）

「その寝ぐらに潜って出てくるなよ……です」のように、終助詞のあとにもでてくるということは、キャラ助詞的である。

このようなことが起きる要因の一つとして、直前の動詞句を名詞句的に扱って付加されると

いうキャラコピュラ一般の特徴があげられる<sup>7</sup>。キャラ語尾の「です」で見られたのと同様、「でおじゃる」や「でござる」などのキャラコピュラにも「ます」や「命令形」のあとに接続する例がある。

- (9) a. 事前にわかった中止や変更の場合は、掲示板になるべくなるべく掲載致しますでおじやる。(2009/2/26、<http://blog.livedoor.jp/ojarus123k/>)
- b. 「ほらっ！早くノート開けでござす！」  
(2009.2.26、<http://www18.atwiki.jp/takaharu/pages/4824.html>)

このように、キャラコピュラが直前を名詞句的に扱うことを踏まえると、さきほどのキャラ助詞のような「です」も、文をまるごと引用して名詞句的な扱いとしていることで生じていると考えられる。

また、もう一つの要因として、キャラ語尾「です」は、後ろに終助詞を付加することがあるにせよ、「です」そのものは活用しないという特徴をもつことがあげられる。不変化であるということは助詞にも見えるということである。これらのことが、「です」において、キャラ助詞的なふるまいを可能にしていると考えられる。

だが、一方で、同じ作品の中において、

- (10) 翠星石「もっと大切な／今がある／ですよ…！」(『ローゼンメイデン』3)  
翠星石「二人はそれまで……／何をするのも一緒/だったですのに…」(『ローゼンメイデン』2)

のような用例もあり、キャラコピュラとしてのふるまいもみせている。つまり、「です」が完全にキャラ助詞化しているとはいいいにくい。

以上のことから、キャラ語尾の「です」は基本的にはキャラコピュラであるが、キャラ助詞的なふるまいも見せる中間的な存在であると結論づけたい。

### 3.3 キャラ語尾「です」によって表されるキャラクタ

3.3 では、キャラ語尾の「です」がどのようなキャラクタの表現となっているかを検討する。重要なことは、社会的なステレオタイプで定義付けることがきわめて難しいという点である。「です」によって表されるキャラクタは、社会的な属性では規定しにくく、どちらかという性格的な属性によって特徴づけられる。

たとえば、試みにタイプをあげてみると、幼いキャラ(タラちゃん『サザエさん』)、かわいいキャラ(仙童紫『ロザリオとバンパイア』)、変わったキャラ(新妻エイジ『バクマン』)、頼りないところのあるキャラ(ダルマ『アキハバラ@DEEP』)など、さまざまなタイプがあ

げられる。社会的なステレオタイプで分けてみようとする、人間以外の存在（カンターテ・ドミノ『灼眼のシャナ』）、外国人（ジョン・ブラウン『ゴーストハント』）、少女（古手梨花『ひぐらしのなく頃に』）、みちる『ながされて藍蘭島』、翠星石『ローゼンメイデン』）などになる<sup>8</sup>。

このように、「です」を用いて表されるキャラクタは、特定のモデルが存在するとは言いにくい。少なくとも、社会的なステレオタイプでまとめて特徴づけることは難しい。このことは、キャラコピュラと違う点である。多くのキャラコピュラは、それ自体が標準のコピュラとは違う語形であり、それがあある特定のキャラクタと結びついている。たとえば、「でおじゃる」は平安貴族、「でござる」は忍者、侍などと結びついている。これらのキャラクタは社会的なステレオタイプの枠組みで規定できるキャラクタである。先ほども述べたように、キャラ語尾「です」によって表されるキャラクタは、社会的な属性では規定しにくく、どちらかという性格的な属性によって特徴づけられる<sup>9</sup>。

キャラ語尾とみなせる「です」は、コピュラとしての形態を変えずに、あくまで統語的特徴を規範からずらすことによって、ある種のキャラクタを表現しようとしている<sup>10</sup>。「です」は本来、配慮表現の一つとして、相手との距離をおくことをその機能としている。しかし、仮にキャラ語尾の「です」のような話し方を常にすると、丁寧にしゃべろうと配慮を示しているものの、うまくしゃべれていないことをも同時に表現することになる。キャラ語尾「です」は、そのときに生じる印象を積極的に利用して、キャラクタの性格的な面を表現しようとしているといえる。たとえば、年代が低い場合は、かわいさのアピールとして用いられ、年代がある程度高ければ（つまり敬語が使えるような年代であれば）、変なキャラクタや頼りないキャラクタとして扱われると考えられる。

このようなキャラクタは、結局、「です」の文法が標準とずれている人物である、という程度の規定にすぎず、実際のキャラクタは、その他の特徴との組み合わせによって決められているということであろう。つまり、ある特定の社会的ステレオタイプを喚起するほどのキャラクタ性をもたない。キャラ語尾「です」の利用のされ方としては、社会的なステレオタイプ像を決めるためというよりは、性格的特徴の味付けのために用いられるものと考えられる。

西田(2010)は、「従来、検討されることのすくなかった、性格的な属性の方面からの役割語の研究が、今後進展されるべきであろう」(p.75)と指摘している。この点から見ても、キャラ語尾の「です」は興味深いといえるだろう。

### 3.4 キャラ語尾「です」の位置付けとキャラ語尾の下位分類基準

これまで、キャラ語尾「です」の統語的特徴とキャラクタとの結びつきについて考察してきた。3.4では、論じてきたキャラ語尾「です」の特徴をまとめつつ、キャラ語尾の体系の中で、それをどのように位置付けるべきかという点とキャラ語尾の下位分類基準について改めて検討したい。



まず、これまでに検討してきたキャラ語尾「です」の特徴を、定延(2007)、定延・張(2007)の基準によって、典型的なキャラコピュラ、キャラ助詞と比較する形で表にまとめると次のようになる。本稿で検討してきた順序と同じく、形態的特徴、統語的特徴、キャラクタとの結びつきの順で表にしている。

	キャラコピュラ	キャラ語尾「です」	キャラ助詞
コピュラと類似している	○	○	×
現れる環境が文末に限られない	○	○	×
モデルが顕在的である	○	×	×

キャラ語尾「です」は、形態的にまさにコピュラそのものである。統語的特徴に関していえば、従属節にも現れ、「です+終助詞」という承接順序になることから、基本的に通常のコピュラと変わらない特徴を持つ。ただ、キャラ助詞的なふるまいも見せることがあった。また、キャラクタとの結びつきに関しては、発話のモデルが顕在的ではない。これらの特徴を総合的に考えると、キャラ語尾「です」は基本的にはキャラコピュラであるが、キャラ助詞的なふるまいも見せる中間的な存在であるということになる<sup>11</sup>。

では、3つの分類基準の関係はどのように捉えるべきなのだろうか。結論を先にいえば、形態的に類似しているかどうか、キャラ語尾のふるまいを決定付けていると考えられる。つまり、コピュラの変異体を利用しているか、創作によるものかという資源の違いが統語的特徴やキャラクタモデルの有無といった性格と結びついているということである。

キャラコピュラは、もともとの形式をもたない創作されたキャラ助詞と違って、形態的に通常のコピュラと似ているため、類推が働き、統語的特徴もコピュラから離れたものになりやすい。たとえば、「です」の場合、まさにコピュラそのものの形態であるため、統語的なふるまいとして、資源となっているコピュラとしての性格をまだ残している。一方、キャラ助詞の場合は、形態的な類推が働くことがない。むしろ、あきらかに異質であり、文中に立つことが許されず、特別な要素として文末に立ってキャラクタを表すという意味だけを付加することになる。

また、コピュラと類似しているということは、歴史的にみて使用されたことがある場合が多く、結果として社会的ステレオタイプと結びつくことが多くなる。それに対し、キャラ助詞はフィクションにおいて創作されたものであり、創作されたときから標準からずれているのであって、歴史性をもちにくい。たとえば、もともと標準的な助詞として「びょーん」「ぷう」があり、それが標準からずれる存在に変化して社会的ステレオタイプを帯びるというようなことは考えにくい。定延・張(2007)は、他の2つの基準と連動しないことがあるという理由で、キャラクタモデルの有無という基準を相対的に軽いものであるとしたが、歴史的な事情という点を踏まえても副次的なものとするほうがよいと考えられる。

このように、形態的に類似しているかどうか、統語的特徴やキャラクタモデルの有無に影

響を与えると考えられる。ただし、これらの基準によって、キャラコピュラ、キャラ助詞のカテゴリ間がはっきりわかれるというわけではなく、連続的であるという点は、キャラ語尾「です」で見えてきた通りである<sup>12</sup>。

#### 4. キャラ語尾「です」の成立背景

本節では、キャラ語尾「です」の成立背景について述べる。普通のコピュラである「です」が、キャラ語尾として用いられるようになった要因としては、「です」の使用領域が拡大している点があげられる。

「です」の接続は、歴史的な事情が絡んでいる。「です」はもともと、特殊な位相による人々が使用していたとされ、今につながる一般的な「です」は、明治の20年頃に一般化したとされている。その後、交通の発達や義務教育の普及により、標準語として全国に広まっていったと考えられている。標準語の形としては、名詞や形容動詞語幹に接続するものが一般化し、次第に「おいしいです」のように、形容詞にも「です」が接続するようになった。1952年に国語審議会が「これからの敬語」が「形容詞+です」を「平明・簡素な形」として認めたのは広く知られている。ただし、「動詞+です」のような形が標準的な形として許されていないということは、これまで述べてきた通りである<sup>13</sup>。

しかし、標準の形とはされていないものの、話し言葉において、「です」が勢力を増してきていることもしばしば指摘されている（井上1995、田中2008など）。また、「ます」のあとに接続する「です」も見られることについても、いくつか指摘がなされている。たとえば宇野(1977)は、「ますです {φ/ね/よ}」「ましたです {φ/ね/よ}」「ませんです {φ/ね/よ}」の用例や、接続助詞を後接する例について多くの実例を紹介した上で、次の四点を述べており、打ち解けていないときなどに、無意識的に「ますです」のような言い方をしてしまうことがある、ということを示している<sup>14</sup>。

- (11) a. どれもが話し言葉（談話調）のものである。
- b. これらの表現をした人には、男性も女性も含まれており、性別による差異は認められない。年齢は、すべてが明らかであるとは言えないが、老若ともに含まれている。ただし、ここには、高校生以下の者は入っていない。
- c. 対話（または会話）において行われているものが非常に多い。（中略）ただし、相手との関係が極めて親しいとか、打ち解けているような状態ではない。
- d. 「…ですね」の形が比較的多く、「…ですよ」その他の形もかなりある。「…です」で言い切りになる形は、(3)には相当あるが、(1)、(2)には少い。なお、「……です」に接続助詞を伴って、次に続いているものも見られる。（引用者注：(1)は「ますです」(2)は「ましたです」(3)は「ませんです」のこと）（宇野1977:826-827よりそれぞれを抜粋）

このように、「動詞+です」や「ますです」のような接続を生み出してしまうのは、日本語の対聞き手の意味の要素が最後に来るという傾向と無関係ではないと考えられる。否定、テンスの後ろに「です」という対聞き手性の要素がくるとするのは、日本語の構造としては一般的である。こうしたことから、丁寧にしゃべろうとしたときに、「です」が最後に付け加わるといような言い方をするようになっても不思議はない。

「です」が文末につく要素になりつつある一方で、標準語の「です」に対する規範的意識があるというのが、現在の実態であろう。ただ、この規範からのずれは、社会的な属性と結びついたステレオタイプを喚起するにはいたっていない<sup>15</sup>。

## 5. まとめ

本稿では、要素の側からキャラクタを見ようという立場にたち、キャラ語尾「です」について考察した結果、次のようなことがあきらかとなった。

- (12) a. キャラ語尾の「です」は、通常の「です」の使い方と違って、意識的にあるキャラクタを表現するために、意図的に規範をずらして用いられている。キャラ語尾「です」の成立には、話し言葉における「です」の拡大が背景にあるものと思われる。
- b. 文中での位置に注目すると、終助詞との承接順序は「です+終助詞」である。また、従属節の中にも現れることがある。ただし、キャラ助詞的なふるまいを見せることもある。
- c. 表されるキャラクタは、「です」の文法が標準とずれている人物である、という程度しか規定できない。それを利用して、幼さ、かわいさを前面にだしたり、変である、あるいは、頼りないといった性格的な特徴を表現する。
- d. キャラ語尾「です」は基本的にキャラコピュラと考えられるが、キャラ助詞的なふるまいも見せる中間的な存在であるといえる。
- e. 定延(2007)、定延・張(2007)で提案された、形態的特徴、キャラクタとの結びつき、統語的特徴の3つの基準のうち、重要なものは形態的に類似しているかどうかであり、それが統語的特徴やキャラクタモデルの有無に影響を与えていると考えられる。

今回は、要素の側からの考察を行ったが、社会的ステレオタイプといった全体的な枠組みからの考察も重要なのは言うまでもない。また、キャラ語尾「です」についても、社会的な属性と性格的な属性との絡みなどについて、まだ考察の余地があると思われる。今後の課題としたい。

## 注

- <sup>1</sup> 以下、インターネットからの用例に関しては、検索日と URL を載せる。用例の下線は筆者による。また、漫画から用例をのせる場合、吹き出しの中で改行されている部分を「/」で示す。
- <sup>2</sup> 「キャラクタ」というとき、類をさす場合と個体をさす場合がある。厳密には、それらを区別した上で、議論すべきだが、類も個体も属性の束に対する名付けの関係にあるという点では同じと捉え(金水 2009 参照)、本稿では細かく区別しない。また、「キャラクタ」と「キャラ」という概念についても本稿では、特に区別せずに扱う。
- <sup>3</sup> 金水(2009)および定延(2010)参照。
- <sup>4</sup> たとえば、定延の言う「発話キャラクタの繰り出し」「発話キャラクタの発動」は、要素を利用することで全体を一時的に変化させる手法と行うことができる(定延 2006、2007 参照)。また、全体と部分の区別に関して、金田(2008)でも全体的特徴と個別の要素を区別する見方がとられ、個別の要素を「役割語要素」と呼んでいる。
- <sup>5</sup> 定延は金水(2003)でいう人物像に相当するものを「発話キャラクタ」と呼んでいる。
- <sup>6</sup> なお、意識調査をすれば、「動詞+です」の接続は許容されない。野村(1999)によれば、「行くです」は 98.6%、「困るです」は 97.6%の人が使用しないと回答している。また、「行ったです」は 95.6%、「困ったです」は 80.9%の人が使用しないとのことである。もちろん、意識調査と使用実態には、ずれが生じる場合が多いことは言うまでもない。
- <sup>7</sup> この点に関して、定延(2007)に「これは「コピュラと違ってキャラコピュラは動詞にも続きやすい」という一般的な形でとらえ、今後、キャラコピュラの一般的な性質から理解していけばよいものだろう」(p.30)という指摘と、「キャラコピュラの使い手は、直前の動詞句を引用句のように名詞句相当と扱ってしまいやすいということか」(p.30)という指摘がある。なお、定延(2007)で指摘されているのは、動詞に接続するという点だけだが、動詞のル形やタ形に接続するだけではなく、「ます」の後ろや命令形などにも接続する点がある点をここで注意しておく。
- <sup>8</sup> ここでのキャラクタ分類は厳密なものではなく、また網羅的でもない。なお、キャラクタの例も、実際は性格的属性によるタイプ分けと社会的属性によるタイプ分けとでキャラクタが重なるが、あえて重複しないように例をあげている。また、「です」を常用するキャラクタと、そうでないキャラクタなどがあり、厳密にはそれらの違いも考慮する必要があるかもしれない。
- <sup>9</sup> 実は、メイナード(2008)が、「第 4 章 言語行為の交渉：アイデンティティ表現としての「だ」」において、本稿のキャラ語尾「です」を使うキャラクタについても、わずかに触れている(キャラ語尾という概念は用いていない)。たとえば、「です」キャラとして、仙童紫の言葉遣いを「ちょっと変わったキャラ(キャラクター、性格、人格)であることを効果的に表現する方法のひとつ」(p.97)と表現し、ダルマの言葉遣いを「そんな言い方を好む義理堅いカタブツ、でも、それほどでもなくある程度親しみもある、というような雰囲気を持った人物、つまり「です」キャラ、を提示する」(p.98)のものであると述べている。ただ、それぞれのキャラクタについて「です」キャラとして触れているにとどまり、一般化しようとしているわけではない。

- <sup>10</sup> 実際には、キャラ語尾の「です」を使うキャラクタの特徴付けは、音調などの要素も関わって形成されているが、今回はその問題には触れない。
- <sup>11</sup> 定延(2007)では、キャラコピュラとキャラ助詞の中間的なものが韓国語にあると指摘しており、その分類として次の2つをあげている。「コピュラと似ている点でキャラコピュラの、モデルが顕在していない点でキャラ助詞的」という特徴をもつ第1類、「コピュラと似ていない点ではキャラ助詞的、モデルが顕在している点ではキャラコピュラの」という特徴をもつ第2類の2つである。
- <sup>12</sup> 連続性に関連して、キャラコピュラがキャラ助詞化への道を踏み出す可能性についても検討の必要があるだろう。3.2でもふれたように、直前を引用して名詞句的に扱うということから、「引用+キャラコピュラ」というようになり、そのときに引用部分が直接語法のように終助詞も含めて引用されれば、結果的にキャラ助詞的な「終助詞+キャラコピュラ」という語順を生むことになる。これと、とにかく最後につけばよい(つくことしかできない)というキャラ助詞とは表面上同じように見える。この点の検討は今後の課題である。
- <sup>13</sup> 「です」の成立や普及の過程など、その歴史については、数多くの研究がなされているので、詳しくはそちらを参照されたい。代表的なものを一部紹介すると、たとえば、中村(1935)、辻村(1959)、辻村(1965)、吉田(1971)、此島(1973)などがあげられる。なお、吉田(1971)や此島(1973)は、それまでの先行研究の成果も含め、「です」の歴史についての概観を得られる。
- <sup>14</sup> なお、「ませんでした」は、標準として認められている。このように、「ます」と「です」の承接順序は複雑である。他に、次のような指摘もある。

丁寧語「ます」「です」をつかうとしても、その過剰には用心したい。「ありますです。」の類は、論じるまでもないことである。日本語のつねとして一日本語の構造・表現法の特徴からして、こんなに累加のおこるのはむりもないことであるが、これではあまりにくどくどしい。やはり「ていねい」意識の過剰と言えよう。(藤原 1956: 37)

この種の丁寧の敬語に関する限り、問題は誤った使い方にあるよりは、

私どもはそう思いますです—会議で

のような、必要以上、十分以上に丁寧な表現の方にあるかと思われる。ひょっとしたらこのような形が、一般の習慣とならないとも保証はできないが、現状ではやはり耳ざわりと言うべきだと思う。

(渡辺 1960: 54-55)

このほか、吉田(1971)においても、「動詞+です」「ますです」のような形についての指摘がある。

- <sup>15</sup> 歴史的に見てみると、今回考察してきた「動詞+です」のような言い方が、実は明治頃にも見られるということが知られている。先行研究によれば、明治期において、動詞や形容詞に接続する「です」は、書生語や方言的なものとされていたようである。たとえば、「用言に直接付く「です」が古くからあり、明治期には書生・漫談用語として認められていた」「方言的発想に由来する表現」(吉田 1971: 466)などの指摘や、「教養ある男性や書生、壮士、兵士のことばとして用いられるのが常体」(原口 1972: 70)などの指摘がある。この問題に関しては、浅川(1998)、浅川(1999)でさらに詳しい考察がなされている。

しかし、これらは、本稿で対象としているキャラ語尾「です」につながるものとは考えられない。本稿で考

察してきた「です」が書生というキャラクタを表しているとは考えにくいからである。むしろ、今回検討してきたキャラ語尾「です」はそういった歴史性をもたない点に特徴があるといえる。ただ、使用のされ方として、かわいい少女との結びつきが強くなっている傾向もありそうであり、今後の検討課題である。

#### 【引用作品】

池田晃久 (2005) 『ロザリオとパンパイア』2 集英社

大場つぐみ・小畑健 (2009) 『バクマン』3 集英社

ピーチピット (2003) 『ローゼンメイデン』2 幻冬社

ピーチピット (2004) 『ローゼンメイデン』3 幻冬社

藤代健 (2008) 『ながされて藍蘭島』13 スクウェア・エニックス

竜騎士07・鈴羅木かりん (2006) 『ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編』1 スクウェア・エニックス

竜騎士07・外海良基 (2006) 『ひぐらしのなく頃に 暇つぶし編』1 スクウェア・エニックス

※その他、インターネットからの用例は、引用する際に検索日とURLを載せた。

#### 【キャラクタのみ紹介した作品】

石田衣良・アカネマコト (2006) 『アキハバラ@DEEP』3 新潮社

小野不由美・いなだ詩穂 (1998) 『ゴーストハント』1 講談社

高橋弥七郎 (2004) 『灼眼のシャナVII』メディアワークス

『サザエさん』(フジテレビ)

#### 【参考文献】

浅川哲也 (1998) 「動詞・助動詞承接の「です」について—明治大正期を中心に—」『国語研究』61, pp.19-40

浅川哲也 (1999) 「形容詞承接の「です」について—形容詞述語文丁寧体の変遷—」『国学院雑誌』100-5, pp.32-53

井上史雄 (1995) 「丁寧表現の現在—デス・マスの行方」『国文学 解釈と教材の研究』40-14, pp.54-61

宇野義方 (1977) 「「ますです」について」松村明教授還暦記念会(編)『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』pp.817-831, 明治書院

金田純平 (2010) 「役割語からみた文末詞対照」金水(編)(2010) pp.37-47

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

金水敏(編)(2007)『役割語研究の地平』くろしお出版

金水敏 (2009) 「役割・キャラクター・言語をめぐって」(シンポジウム・研究発表会「役割・キャラクター・言語」発表資料)

金水敏(編)(2010)『役割・キャラクター・言語—シンポジウム・研究発表会報告—』科学研究費補助金基盤研究(B)「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」研究成果報告書(課題番号:19320060、研究代表者:金水敏)

此島正年 (1973)『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社

定延利之 (2006) 「ことばと発話キャラクタ」『文学』7-6, pp.117-129, 岩波書店

- 定延利之 (2007) 「キャラ助詞が現れる環境」 金水(編) (2007) pp.27-48
- 定延利之 (2010) 「キャラクタは文法をどこまで変えるか？」 金水(編) (2010) pp.82-88
- 定延利之・張麗娜 (2007) 「日本語・中国語におけるキャラ語尾の観察」 彭飛(編) 『日中対照言語学研究論文集』 pp.99-119, 和泉書院
- 泉子・K・メイナード (2008) 『マルチジャンル談話論—間ジャンル性と意味の創造—』 くろしお出版
- 田中章夫 (2008) 「「マス」から「デス」へ—丁寧体の変容—」 近代語学会編 『近代語研究 14』 pp.325-341, 武蔵野書院
- 辻村敏樹 (1959) 「近世後期の待遇表現」 『国語と国文学』 36-10, pp.55-67
- 辻村敏樹 (1965) 「「です」の用法—近世語から現代語へ—」 近代語学会編 『近代語研究 1』 pp.341-362, 武蔵野書院
- 中村通夫 (1935) 「「です」の語史について」 『国語と国文学』 13-3, pp.70-96
- 西田隆政 (2009) 「ツンデレ表現の待遇性—接続助詞カラによる「言いさし」の表現を中心に—」 『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』 45, pp.15-23
- 西田隆政 (2010) 「役割語としてのツンデレ表現—「常用性」の有無に着目して—」 金水(編) (2010) pp.68-81
- 野村貴郎 (1999) 「用言に接続する「です」の考察」 武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集編集委員会(編) 『武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集』 pp.79-92(588-575), 和泉書院
- 原口裕 (1972) 「「デス」の推移—活用語に接続する場合—」 『国文研究』 5, pp.59-71
- 藤原与一 (1956) 「民間の敬語生活とその改善—「ていねい」の意識について—」 『言語生活』 52, pp.32-38
- 前川喜久雄 (2007) 「コーパス日本語学の可能性—大規模均衡コーパスがもたらすもの—」 『日本語科学』 22, pp.13-28
- 山口治彦 (2007) 「役割語の個別性と普遍性—日英の対照を通して—」 金水(編) (2007) pp.9-25
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』 明治書院
- 渡辺実 (1960) 「敬語が正しい・正しくないということ」 『言語生活』 102, pp.48-57

## 付記

本稿脱稿後、西田隆政 (2010) 「「属性表現」をめぐって—ツンデレ表現と役割語との相違点を中心に—」 『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』 46, pp.1-11 という重要な論考が発表された。本稿で扱ったキャラ語尾の「です」は、西田(2010)のいう属性表現に相当するものと思われる。

本稿は、シンポジウム・研究発表会「役割・キャラクター・言語」(2009年3月28日・29日、於神戸大学百年記念館)におけるポスター発表の内容に加筆・修正を加えたものである。席上、その他で有益なご意見・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。なお、本研究は、科学研究費補助金基盤研究(B)「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」(課題番号:19320060、研究代表者:金水 敏(大阪大学大学院文学研究科教授)、研究期間:平成19~22年度)の支援を受けている。

(かわせ すぐる・本学大学院博士後期課程)